会員生協からの報告

みやぎ生活協同組合

■　みやぎ生協の2年間の取り組みと今後の課題

この2年間、みやぎ生協では被災者支援として、「共同購入個配手数料の割引き」「買い物代行サービスふれあい便」「移動販売車せいきょう便」等による買い物支援や、ボランティアセンターでの「ふれあいお茶会」などを継続して行っています。

ふれあいお茶会（東松島）

また、震災により大きな打撃を受けた地域産業の復興支援を、「食のみやぎ復興ネットワーク」をとおして幅広く進めています。

さらに、震災による累積損失の解消を目指し、経営改善に取り組みました。これにより2012年度は14億円の経常黒字の見通しとなり、2年ぶりに出資配当を再開できる見通しとなりました。

今後は、被災地支援活動の継続と拡大を進めるほか、安定した事業活動の推進と経営体質の強化を目指します。また地域のくらしをサポートする為、「コープフードバンク事業」の拡大や、「生活相談・家計再生支援貸付事業」の開始を計画しています。

移動販売車せいきょう便

復興はこれからが正念場です。事業と活動を通して安心して暮らせる地域社会作りを進めます。

（機関運営課課長　稲葉勝美）

生活協同組合あいコープみやぎ

■　生産復興・地域再生に貢献できる生協を目指して！

大震災と原発事故の直後は誰もがこれまでのようにはやっていけない、生き方を変えようと言いましたが、世の中は再び元に戻ろうとしています。こうした中で、あいコープは震災以降、いたずらに物量を追うのではなく取扱品目を限定し、地場生産者との結び付きを強化し、生産復興・地域再生に貢献できる生協を目指してきました。

被災地はこのままでは土木工事が終われば誰も人がいなくなって、道路と橋だけが残ったということになりかねません。雇用を生み出すとして企業による施設園芸が進んでいますが、これは農業の復興というよりも野菜工場というべきです。また水産業においても特区の名で企業の進出が図られていますが、競争による乱獲から協同し育てる漁業へ転換するための共同体の再生こそが必要です。

原発に象徴される大規模プラントではなく、地方に根づいた一次産業を復興させていくことが持続可能な社会を作っていくことであり、私達はその役割の一端を担いたいと思っています。

南三陸町歌津の牡蠣生産者と組合員が交流（十一月）

（理事長　小野瀬裕義）

会員生協からの報告

松島医療生活協同組合

■　復興再建事業「まつしまの郷」、今秋オープンへ

「まつしまの郷」完成予想図

3 月、遅れていた「まつしまの郷（デイサービスなど複合介護事業所）」の新築工事に着工し、秋オープンをめざしています。

「まつしまの郷」は、2 年前の東日本大震災の津波で全壊した「なるせの郷」の再建事業で、当医療生協の本格的な復興事業の第 1 段目です。建設までには紆余曲折もあり、1 年以上も計画が遅れました。建設場所は、松島海岸診療所の真向かいの駐車場で、医療との連携がより密な場所です。又、機能の強化も図り、最新の入浴施設や、災害時には緊急避難施設に転用できるスペースの確保、更に、脱原発運動の観点から太陽光発電なども計画しています。

建設資金は、全国の仲間からの義援金と名古屋の篤志家からの寄付金を基に、宮城県災害復旧支援事業費補助金と、福祉医療機構の災害復旧資金を活用し、約 2 億円です。

この復興再建事業は単協の事業ですが、全国の仲間の皆さんからの物心両面に渡るご支援に応えるための事業としても位置付けており、組合員・職員の結束を強め成功させる決意です。

（専務理事　青井克夫）

みやぎ県南医療生活協同組合

■　「みやぎ虹の架け橋復興支援センター」とともに

山元町花釜で秋まつり
スタッフ全員で記念写真

2012 年度は、全国の医療生協（特に近畿ブロックの医療生協）の力を借りながら、山元町の仮設住宅での支援活動（健康チェックや脳いきいきトレーニング）を、地元 NPO 団体の皆さんと一緒に毎月 2 回定例で開催したり、在宅被災者の皆さんへの支援として 2 か所での茶話会を毎月開催しました。また、夏まつり（7 月）、秋まつり（11 月）も被災地の皆さんと一緒に計画し実施してきました。

山元町にできた 2 つ目の班
「りんご班」で脳トレ

これまでの支援活動で医療生協の組合員も少しずつ増え、2 つの班が誕生しました。それぞれの班は、被災地の地域コミュニティーづくりや健康づくりに積極的に取り組んでいます。

昨年 9 月から、新たに柴田町に「みやぎ虹の架け橋復興支援センター」を開設し、近畿ブロックの医療生協から職員が常駐し、被災者の引っ越しや草取り、片づけなどの要望を受け入れ、作業の組み立て、定例支援の準備、近畿からの支援スタッフの受け入れなどを行っています。

2013 年度も、被災者の皆さんに寄り添い、思いを共有しながら、地域の他団体とも連携して様々な支援活動を継続していきます。

（常務理事　児玉芳江）

会員生協からの報告

東北大学生活協同組合

■　組合員と共に継続的な震災復興・被災地支援を！

あの日から間もなく２年の月日が流れようとしています。キャンパスのなかは平穏を取り戻しつつありますが、それとともに、あの日の出来事が忘れ去られ、風化しつつあるのではないかと危惧します。とくに学生は毎年入れ替わっていきます。あの日、1 年生だった学生はこの春４年生になります。震災を忘れることなく、被災地の人々に寄り添いながら、次の世代に被災体験を語り継いでいくこと。それが震災復興にむけて私たちが果たすべき役割であり使命です。

そのために、津波の被害が残る海岸地域への被災地視察を行いました。たくさんの学生の参加があり、現地ミーティングでは、震災復興にむけて自分は何ができるのか､語り合いました。また、七ヶ浜町のボランティアセンターと協力して、子どもたちへの学習支援ボランティアを行いました。ボランティア活動では、単に勉強を教えるだけではなく、子どもたちとのコミュニケーションも大切にし、地域との交流を深めました。

七ヶ浜町での学習支援ボランティア

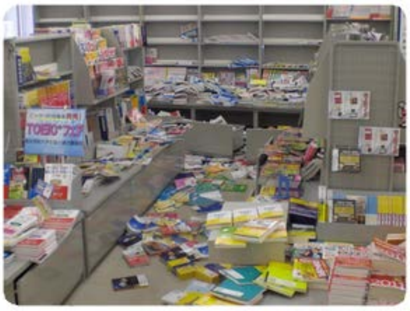
これからも東北大生協では組合員と共に継続的な震災復興・被災地支援をすすめていきます。

（専務理事　佐藤和之）

東北学院大学生活協同組合

■　「ありがとう（たすけあい）」をふやしたい！

被災した学生が一番多かった東北学院大では、被災直後に全国の生協の仲間からの「全壊見舞金（364 人）原子力災害見舞金（36 人）を学生組合員に贈ることができました。それぞれ３万円･1 万円という額でしたが、受け取った学生組合員からのメッセージには逆に元気をもらい「ありがとう」の言葉に、こんなにも力があることを知らされました。



震災当時の店舗の様子。
けが人が出なかったのが幸いでした。

これまでは学院大生協として十分な活動ができていませんでしたが、今後は、被災地を知らせる活動としての「被災地ツアー」や「被災者支援メニュー」にも取り組み、記憶を薄れさせない活動を積極的に展開していくことが必要になってきています。学内にあるボランティアセンターとの連携も深めていきつつ、大学生協だからやれること“これからの学生が被災地区や被災者への関心”を持続させられるような活動を、継続し発展させることに力を注いでいくことで、多くの「ありがとう」を増やしていければと考えています。このことは「2013 年の総代会」でも確認していきたいと思っています。

（専務理事　細畑敬子）

東北工業大学生活協同組合

■ 大学との協力

震災後、大学と協力して、いくつかの対応をさせていただきましたが２つほどご紹介したいと思います。

ひとつは、JRの不通等による自宅からの通学が困難な学生のためのアパート紹介で、提携会社にも協力をいただき、敷金、手数料を減額または無しにしてもらい、学生の物件を確保しました。当時は本数の少ない臨時バスで数時間をかけて通学しなければならなかったため、少しは役に立つことができたのではないかと思っています。

もうひとつは、大学では震災後、「地域復興のための共同プロジェクト」を立ち上げ、公募により17のプロジェクトが採択されました。その中の「宮城県食品工業　学生参加による販路・マーケティング支援プロジェクト」（経営コミュニケーション学科　佐藤研究室）に協力させていただきました。これは被災地の食品会社の商品を販売するためのもので、研究室で現地まで赴き、調査、仕入から販売計画を協議し、生協では最終段階を担当し、

「宮城県食品工業　学生参加による販路・マーケティング支援プロジェクト」に協力

塩竈市の食品メーカー「高浜」のさつま串揚げの販売提供を行いました。

昨年末には大学と災害協定を締結しました。今後も協力をしながら、活動を展開していければと考えます。

（専務理事　濱谷崇）

尚絅学院大学生活協同組合

■ 震災後の活動

震災当日は、帰宅できない学生や教職員に、店舗にある食品や日用品を提供しました。その後、春休みに出勤されている教職員や学生のため食料調達に奮闘しました。４月から全国の大学生協の支援活動が始まり、被災者組合員への募金活動、お見舞金の支給、５月は新学期事業

映画上映会の模様（2011年11月）

に東海地区から１ヶ月間人的応援がありました。また、販売価格の中から募金にあてる活動も盛んに行いました。年２回の生協まつりでは学生委員会が、募金の呼びかけをしました。11月には大学の防災備品の商品選定に協力し、納品をさせていただきました。また震災前に石巻で撮影された映画「エクレール・お菓子放浪記」の学内上映にも協力しました。上映会には、地域の方々も多く鑑賞されました。

2012年は、「未来の大学生応援募金」の募金箱を置いて、被

学園祭で放射線について掲示（2012年10月）

災した高校生の支援に取り組みました。また学園祭では、原発事故の放射線被害の報告をしました。今後も、支え合うたすけあいの精神で温かい事業活動を心がけ、大学や全国大学生協のボランティア活動に積極的に参加をしていきます。

（専務理事　中村祐志）

会員生協からの報告

宮城教育大学生活協同組合

■　学生委員会企画「震災からの復興を考える」

私たち宮教大生協学生委員は今年度、震災復興支援プロジェクトを立ち上げ、宮教生にもう一度東日本大震災について考えてもらえるように活動を行ってきました。

そのひとつの取り組みとして、昨年 12 月に『宮教生が考える震災復興～私たちにできること～』というイベントを開催しました。このイベントには、大学のボランティアチームや震災復興のボランティアを行っているサークル、外部の NPO 団体など合計 9 つのボランティア団体に参加していただき、各団体のパネル展示と活動紹介を行いました。また-、大学内にある教育復興支援センターから、現在の被災地の状況やボランティア活動についてお話をいただきました。学生・教職員合わせ約 50 人の参加があり、薄れつつある震災復興への気持ちを考え直してもらう機会となりました。

東日本大震災から 2 年が経ちますが、まだまだ復興への道は遠く、私たちは被災地の大学生として震災に向き合い、自分たちにできる復興支援を考えていく必要があると感じます。そのことを組合員に伝えていけるよう、取り組みを行っていきたいと思います。

パネル展示の前で、参加者はボランティア活動の詳細など説明を受けました。

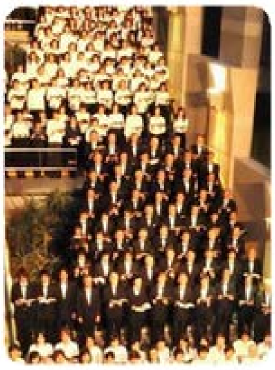
（学生委員　加藤郁美）

宮城大学生活協同組合

■　「復興支援コンサート」をサポート

宮城大学では昨年 12 月 23 日（日）大和キャンパスにて「第九で宮城を元気にする」と題して、『宮城大学復興支援コンサート 2012』が開催されました。

この企画は、震災が発生した一昨年に引き続き、宮城大学が企画実施したもので、宮城大学生協もその一部をお手伝いさせていただきました。



地域の方々と教職員・学生が思いを込めて歌いました。

地域の方々や宮城大学の学生・教職員などで結成した合唱団と管弦楽団が、東日本大震災で犠牲となった方々へ鎮魂と、復興への思いを込めて、ベートーベンの『交響曲 第九』を演奏しました。大和キャンパスの 1 階から 4 階まで吹き抜けになっている独特の空間にダイナミックな歌声がこだましていました。

1 階メインロビーには 700 人を超える方々が訪れ、暖房が充分とは言えない中で、大学生協から来場者の皆様全員に、使い捨てカイロをプレゼントしました。他にも温かいお飲物や軽食のサービスなども行い、初めて宮城大学を訪れた市民の皆様にも好印象と感動の一日になったのではないでしょうか。これからも大学とともに、復興支援プログラムに協力していきたいと考えています。

（専務理事　井上養明）

会員生協からの報告

宮城学院生活協同組合

■　自分たちにできることを

震災から 13 ヶ月経た 2012 年 4 月 20 日に沿岸部の南三陸町で、会議が開催されることになり訪れました。

あの日から 1 年以上経っているのに復興どころか復旧もままならない状況を目の当たりにし、4 月末からボランティア活動に参加することにしました。休みを利用して日帰りではありますが、南三陸町を中心に 60 回以上活動に参加しました。時には、学生委員や職員も私の動きに共感し、一緒に活動に参加してくれました。

9 月には、全国大学生活協同組合連合会東北ブロック主催の復興支援ボランティアに学生とともに参加しました。

震災発生からもうすぐ 2 年経とうとしていますが、今後も災害ボランティアセンターが開設されている間、可能な限りボランティア活動を継続していきたいと思っています。

また、10 月から学生食堂で、被災地の食材を取り入れたメニュー（宮城県南三陸産の鮭を使用したはらこ飯・宮城県石巻産の牡蠣を使用したカキフライ・岩手県大船渡産のサンマを使用した塩焼きと生姜煮）を提供しました。今後はさらに新メニューを増やしていき、生協の中だけではなく学生を巻き込んで、被災地支援を行っていければと思っています。

9 月のボランティアの様子

（専務理事　佐藤洋志）

大学生活協同組合
みやぎインターカレッジコープ

■　東日本大震災からの復興・再生の取り組み
～第２ステージへ～

東日本大震災から 2 年が経ちます。みやぎインカレは今後も東日本大震災からの復興・再生の取り組みを継続します。具体的には右記を予定しています。

昨年夏に開催したインカレ主催「震災募金バザー」

1. 理事会内に震災再生推進チームを設け、取り組みを計画的に進めます。
2. 引き続き組合員とともに、東日本震災を忘れないように、取り組みを推進します。
   ①各キャンパスで、東日本大震災からの復興再生の取り組み写真パネル展示会を開催します。
   ②継続して被災地視察を、組合員参加で実施します。
   ③被災地支援ボランティアを継続します。
3. 全キャンパスで「東北の大学生協共同企画＝未来の大学生応援募金＝被災した高校への寄付」を引き続き行います。
4. 大学や地域と協力し、東日本大震災からの復興・再生の取り組みを継続します。
   ①1 高専・3 大学と締結した災害時協定の具体化を進めます。
   ②高専・大学と協力し合いボランティア養成を進めます。

（専務理事　青柳範明）

会員生協からの報告

大学生活協同組合東北事業連合

■　2012年震災復興支援のとりくみ

【被災地視察のとりくみ】
閖上・荒浜・七ヶ浜方面への被災地視察は5回実施し、のべ147人が参加、南相馬方面への視察は1回実施し、25人が参加しました。今後も宮城・福島での視察を継続するとともに、岩手の視察も検討予定です。

【ボランティアのとりくみ】
七ヶ浜地区で、大学生による学習支援ボランティアを行いました。これまでに3回行い、ボランティア参加者はのべ39人、参加した小中学生はのべ 54 人となっています。2013年は毎月定期的に開催する予定です。南三陸でもボランティアを行い、大学生22人が参加しました。

【未来の大学生応援募金のとりくみ】
全国連帯を巻き込んで「未来の大学生応援募金」の取り組みを進めました。2012年12月末日現在の募金額は8,172,406円で、そのうち会員生協からの募金額は 567,077 円です。また今後（2013年2月中旬～）、募金を使って被災の大きかった高校に、オープンキャンパス参加等支援の義援金を送る予定です。

【現地の経済的復興支援】

被災地視察　板垣理事長によるガイド

被災地の食品加工工場で生産されたかつお節を使ったメニューの展開や、福島で生産されている安全な割り箸を積極的に使用するなど、経済的支援を進めました。

2013年は、組合員に知らせる活動をすすめ、持続的な復興支援を構築していきます。

（常務理事　峰田優一）

みやぎ仙南農業協同組合

■　大震災から２年がたって

当ＪＡは内陸部に位置するため津波の被害は免れたものの、米倉庫のはい崩れや壁の崩壊等営農施設を中心に約２億円強の大きな被害を受けました。

地震発生直後に緊急災害対策本部を設置、「いきもの」である営農継続のため、待ったなしの農業施設復旧、燃料、飼料手配等に追われ、一方では被災組合員の生活資金対策、建物共済被害調査・共済金支払等の業務に尽力してきました。

その後の全国農協組織による義援金や農業倉庫基金等によりほぼ被害額を補てん、心配された 2011 年度決算を無事正常に乗り切ることができました。

また、福島県に隣接するＪＡとして、セシウム基準値100ベクレルはとても厳しい試練でした。セシウム吸収抑制対策として管内の市町から支援を受け、「不検出」を目標に全水稲作付面積に塩化カリを散布、12年産米集荷が終わり、組合員の結集によりその目標を実現することができました。そして13年産米

コンベア式セシウム検査機器を使用した検査の様子

への対策が順調に進んでいます。

いつもは空気のように地味で存在感の希薄な農協事業ですが、自分たちの事業が地域にとっていかに重要なものだったのか、また農協系統事業を含めて「協同の力」とは何なのかを改めて認識できた２年間でした。

（営農経済部部長　三戸部文夫）

会員生協からの報告

宮城労働者共済生活協同組合

■　東日本大震災から２年にあたって

保育所等で「読み聞かせ会」を開催

全労済宮城県本部では、東日本大震災復興支援（社会貢献）活動の一環として２つの取り組みを行ってきました。

１つは、甚大な被害に際し、被災地の生活に密着する地域防災活動への支援を行う目的で、県内 6 箇所の消防団へ助成を行いました。

２つ目として、被災地の子どもたちへの心のケアと健全育成を目的に、被災 3 県（岩手県、宮城県、福島県）の保育所等で、朝日小学生新聞連載中の「やなせたかしのメルヘン絵本」の読み聞かせ会を実施しました。

宮城県では、12 月 25 日（火）に仙台市の将監保育所、根岸保育所での開催を皮切りに、石巻市、名取市など県内各地で実施をしてきました。

読み聞かせについては、NPO 法人『みやぎ子どもの文化を支援する会』にご協力いただき、共同で子どもの健全育成にむけた取り組みを進めました。

（専務理事　阿部田克美）

宮城県高齢者生活協同組合

■　協同の心を通わせて「被災地に咲く花たち」ハガキ

渡波仮設住宅での支援活動

震災から 2 年を迎えます。

ささえあい生協宮城（宮城高齢協の愛称）では、この 1 年間、全国の高齢協の皆さんと一緒に、被災地支援活動を継続してきました。①数回にわたる仮設住宅支援活動②大船渡被災地復興支援ツアー③帽子や靴下やひざ掛けなどの編み物支援品のお届け④復興支援ハガキの普及など、高齢者生協としての特徴を生かした取り組みを行ってきました。

石巻パソコン愛好会製作
「復興支援ハガキ（5 枚組）」

中でも高齢協石巻地域福祉事業所の石巻パソコン愛好会の皆さんは、「風化」させてはならない被災地の様子を、それぞれがカメラを片手に取材し、厳しい自然の中で花咲かせる草花たちの姿を通して、生きる希望を手作りの復興支援ハガキ「被災地に咲く花たち」にしあげました。5 枚 1 組で 1,200 組（全部で 6,000 枚）作成し、この作品を全国の高齢協の仲間の皆さんに届けています。

宮城高齢協では 3 月 10 日（日）に、「伝えたい 郷土（ふるさと）の 現在（いま）・過去（きのう）・未来（あした）（語りつごう 郷土みらい 復興を語るつどい）」を、こ～ぷのお家いしのまきにおいて開催します。被災された皆さんと地域が元気になる取り組みを、これからも続けていきたいと思います。

（専務理事　山田栄作）